

第 26 回日米インタープリテーション研修会 参加報告

2024.9 - 2025.8 鹿谷麻タ（しかたに自然案内）

■テーマ：文化資源のインタープリテーション

■研修拠点：キャニオン・デ・シェイ国立記念物公園（アリゾナ州）

■日程：2024 年 9 月 7 日（土）～15 日（日）

■参加者：竹原、岡田、古瀬(岳)、鹿谷、内山、黒田、和田、中山、五十嵐 合計 9 名

■スタッフ：日本IP協会より 古瀬(浩)、増田 NPS国際部より Rudy D'Alessandro

Day1：9月7日（土）

○夕方、ニューメキシコ州アルバカーキ空港に集合

・LAX乗り継ぎチームは入国審査に時間がかかり、乗り継ぎ便に遅れそうになって大変だったとか。レンタカー2台を借りてホテルへ。夜はホテル近くのレストランで夕食。



Day2：9月8日（日）

●チャコ・カルチャー国立歴史公園（CHCU、ニューメキシコ州）

Chaco Culture National Historical Park : <https://www.nps.gov/chcu/index.htm>

西暦850～1250年のプエブロ民族の文化の中心地であり聖地。

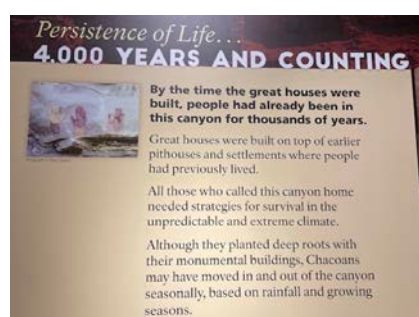
ここでは特に案内解説は受けずに自分たちで見学。レンガ積みの建造物の規模に圧倒される。



公園入口



チャコ峡谷の模型



展示解説



公園内



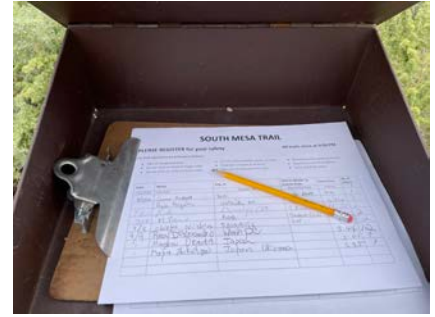
屋外解説板



古代プエブロの住居跡



↑注意書き（距離、所要時間、水持参など）を読みサインしてからトレイルに入るよう促す掲示板



トレイルに落ちている昔の陶片



←Kiva：儀式を行う円形・半地下の建造物



Common Raven ワタリガラス



トカゲの一種 Desert Whiptail?



White Tailed Deer オジロジカ

- ・タフアリゾナ州チンレイ着、Thunderbird Lodge に宿泊
Thunderbird Lodge : <https://www.thunderbirdlodge.com/>

Day3：9月9日（月）

●キャニオン・デ・シェイ国立記念物公園（CACH、アリゾナ州）

Canyon de Chelly National Monument : <https://www.nps.gov/cach/index.htm>

Canyon de Chelly：もとはナバホ語「Tséyi」→ スペイン語で de chelly「デ・シェイ」と発音。



ビジターセンター入口



ナバホ族の伝統家屋ホーガン



ホーガンの中

【ウェルカムセッション】

●公園スタッフの紹介

- ・Lyn Carranza：キャニオンデシェイ、ハップルトレディグポスト、ナバホナショナルモニュメントの3つの公園の所長をして11年目。息子の奥さんがチンレイ出身なので、ここは「義理の土地」。

- ・ Fernando Jones：副所長になったばかり。ナバホ族。このエリアの警察署長をしていた。ガナード出身、ハップルトレーディングポストの向かいに住み、奥さんはチンレイ出身で中学校の数学の先生。
- ・ Sharlot Hart：NPS南アリゾナオフィスの考古学者。フェニックス生まれ、アリゾナで過ごしてきた。
- ・ Ravis Henry：パークレンジャー。ナバホ族でチンレイ出身。出身にはいろいろなクラン（ファミリーの系統、コヨーテクランとか）が混ざっている、母がNMのアラモ、父がここチンレイ。ナバホの言葉もできる、コミュニティとの間の繋ぎ役。



↑左から：レイヴィスさん、リンさん、シャーロットさん、フェルナンドさん

● Lyn Carranza リン・カレンツァさん、公園所長 公園の共同管理について

- ・ キャニオンデシェイの国立公園ユニットは特別：普通は国有地だが、ここはナバホ族の土地で、公園内に（サウスリムと峡谷の下）ナバホ族の家族が住んでいる。
- ・ このエリアは観光業が中心。ただしアメリカ政府との関係、ナバホネイションとの関係などいろいろある。
- ・ 1931年4月1日に国立公園に制定された。キャニオンデシェイ内でのナバホ族の全ての生業の権利（鉱物、農業・放牧など）が守られる決まりが作られた。しかし具体的な方策は決められていなかったもので、双方話し合いながら決めていった。
- ・ 1985年、Resources Committee of the Navajo Council が作られた → エリア内での建築物などについて委員会で話し合われた。
- ・ Joint Management Plan は、ナバホ政府、アメリカ政府のインディアン局（Bureau of Indians Affairs; BIA）、NPSで今も話し合われている。



公園所長のリンさん

- ・ ステークホルダーが複雑：どこにどういう建物を建てるか、色々な広告看板をどうするか（ふつうの国立公園では看板は許可されない）、違法に立てられた建築物をどうするかなど課題が色々ある。自分が長く所長をしているのは、すぐに変わるとナバホ政府や色々なところの関係性が作れなくなるから。
- ・ いくつかの課題：住民が考古学的な場所に勝手に観光客を連れていく、野犬や野良馬の存在（保健的な管理不足、数の増加）、工芸品の販売をどこでやるか）、法律で取り締まることへの衝突。
- ・ 3つの異なる組織が話し合って決める必要がありつつ、どこが責任を取るのかが問題。コミュニティが全てに同意するわけではない。
- ・ キャニオンデシェイは通常の公園が持っている General Management Planを持っていない。1990年に作ろうとしたがNPS主体で作られてナバホへの相談が足りず、ナバホ側に拒否された。
- ・ Foundation Document (2015)：コミュニティで話し合いを重ねた。住民にとってCanyon de challyは何が重要なのか？ → 家族（土地と結びついている）、美しさ、伝統、中心、農業、ストーリー、過去との結びつき、などが出てきた。
- ・ ナバホの自然資源局 Department of Natural Resources の Bidtah Becker にFoundation Documentを渡したら、パラパラめくって「これはまるでNPSの書類みたいだ」と言われた。
- ・ アメリカには約570の先住民族があるが、ナバホ族は40万人、27,000平方マイルの土地に及び、最大の部族。ナバホネイションは主権国家で、1868年に独立国として認められた。1990年に、アメリカ政府と同じような政府システムを取り入れた。大統領は選挙制、3権分立（法律、議会）、ナバホ族議会に24名の議員がいる。さらに110のチャプター（市町村）があり市長、部族（トライバル）議員もいる。
- ・ 自然資源と文化資源は切り分けられない。国立公園は自然資源だが、考古学遺跡はアメリカとナバホ国では意味合いが大きく異なる。

- ・そのため、ナバホネイションのビジョンを決めようということになった。これはコミュニティ、両国政府、NPSが支持できるものでなくてはならない。そこで、ナバホネイション、BIA、NPSと6回の一般公開ミーティング（数百名参加）を行い、2016年に「The Canyon de chally Vision」が作られた。「峡谷の価値を尊重し、その美しさ、資源、文化を未来のために保護し、維持する」。「hozho dooleet」これはナバホ語で「美しく、バランスが取れ、調和し、尊重される」という意味になる。
- ・システムを管理・維持するには、必要なリソースを確保する必要がある。「Strategic Agreement」協定が2018年6月に3者で署名された。Appendix に、各組織でこれまで制定された、ここで取り扱われるべき各種の法律や決め事が掲載され、整理された。計画プロセスを継続する資金も確保されている。また、コミュニティメンバーで構成される「キャニオン・キーパーズ」が作られた。この後、そのメンバーであるジェニーを紹介する。

● Jenny Yazzie ジェニー・ヤゼーさん（英語名、ナバホ語名もある）

地元先住民族の視点を通した公園管理活動

- ・Canyon de chally の中（谷の下）に住んでいる（この1家族のみ。多くは谷の上に住む。農業等で一時的に谷の下を訪れる人はいる）。3つの政府のCoマネージメントに長く関わっている。先住民は元の土地から出されている人々もいるので、そうしたことを尊重して、融合された管理を考えていく。
- ・先住民の家族性＝クラン、子どもは母方のクランを受け継ぐ。母方：ケヤニ（家の塔）、父方：組んだ腕。
- ・息子と孫と暮らしている。キャニオンは神聖な場所で、歌や踊りのセレモニーの場所が決まっている。母からの土地に住んでいる。Work land：農業、桃畑をしている。
- ・電気は来ていないので太陽光発電、水は溜めたもの。雨は3時間で乾いてしまうので、農業は厳しい。25マイル先のダムから一時的に流してもらったがまだ足りないで、放流の頻度を増やして欲しいとお願いしている。野犬や、土地の浸食の問題もある。
- ・一人一人の声は届きにくいので、コミュニティで集まってやることになった。Canyon keeper を作って交渉するようになった。今年は話し合いが多かった、次の年は少なかった、という8年を繰り返してきた。Covidを経て、畑を新しく耕すようなときに、みんなで相談して協力する形に戻っていった。Canyon keeper が、自分たちの声を届ける唯一の方法。
- ・今の子どもたちは携帯電話をさわってばかり。若い人は農業にあまり興味がない、学校や仕事で若い人はフェニックス、デンバー、アルバカーキに出ていく、キャニオンは年配者だけになる。
- ・昔のように放牧や畑、ナバホの伝統的な桃の木栽培を復活させたい。
- ・昔は1000本以上の桃の木が植えられていたが、1800年代にキット・カーソンの軍が来てナバホ族を追い出し、木がみな切られてしまった。
- ・家に2～3本の桃の木があって、タネを周囲に分けている。ナバホネイションの大きなお祭りで桃を売り、800ドルの収入になったので、若い人にも戻ってきて欲しい。
- ・5000本の桃の木をキャニオンに戻したいと誰かが言ったけれど、どうすれば良いだろうという話になった。桃はお金の循環になると気づいた。加工してお店や海外に出したりできたら、若い人の仕事になって戻ってくるかもしれない。桃を増やすにはもっと水が必要なので、供給を増やすよう各組織ともしっかり調整が必要。
- ・各組織のルールを突破して働きかけていくのに時間がかかる、誰に話せば良いのかを見極めることが大事。
- ・ナバホが自給していくようにしたい、太陽光でテレビも冷蔵庫もインターネットもあることをナバホの人にも見て理解してもらいたい。
- ・夏は観光客が多い。自分は人が来てここの美しさを見てほしい。それによって良い循環が生まれるといい。水面下では多くの課題があるので、それを知って欲しいし、若い人に戻って峡谷を守ってほしいと思っている。



ジェニーさん

<質問>

- ・相談や協働のために、BIA、NPS、ナバホネイションでチャプターはいくつ関わっているのか？
→80家族くらいと関係していて、そのうち30~40名がCanyon keeperに積極的に関わろうとしてくれている。
→Canyon keeper は峡谷に住んでいる人の市民グループ、常時参加が10名くらい、大きなミーティングで50~60名くらい。もっと増やしたい。
- ・水の問題について
→ダムはレクリエーション目的で作られたが、魚もいないしあまり使われていない。それでもっと水を流してくれとお願いしている。
→雪がとて多い年には、峡谷の下に膝くらいの水がずっと溜まって、車の移動ができずに困った。
→水の問題は数10年。10年前はナバホの80%人々が水道にアクセスできなかった。シャワーは週1回だった。今は50%。コロナの時に水問題が深刻になって、今も働きかけている。
- ・若者が集まる場所と祭りについて
→ナバホは家族中心、遠くに住んでも誕生日やセレモニーの時に戻ってくる。地域の祭りというよりは家族の集まりで帰ってくる。
→ナバホトライバルフェアは5箇所、チンレイで2.5万人、大きいところで10万人集まる。
- ・桃の栽培について
→桃にはいろいろ種類がある、生のほか、昔は割って岩の上でドライにして冬の保存食にしていた。
→自分は3種類育てている。
→桃の流通には生のほかに、瓶詰め、冷凍などがあると思っている。
→キャニオン・デ・シェイの桃は有名、他に野菜、りんご、なしもあるので販売できるようにしたい。



セッションの様子



竹原さんのプレゼン



岡田さんとシャーロットさん

● 日本側からのプレゼン

- ・竹原真里さん：日本の国立公園管理について
- ・岡田真弓さん&Sharlot Hartさん：NPSと日本の遺産解説協力
- ・古瀬浩史さん：日本におけるインタープリテーション計画の現状



古瀬さんと増田さん

● レイヴィスさんからのコメント

アメリカ文化では、先史時代「pre-historic」は1800年代中頃のコロンブス以前のことを指す。先住民にとっては、自分たちがいないみたいで「先史」という言葉は好きではない。言葉をどう使ってインタープリテーションを行うのか、こういう場所では考える必要がある。

【エクスカーション】

● 四駆+パークレンジャー・レイヴィスさんによるキャニオン・ドウ・シェのフィールドツアー

- ・ 四輪駆動車：地元ツアー業者
- ・ 解説案内：レイヴィスさん

● レイヴィスさんの話

- ・ Canyon de Chelly のレンジャーは3名。ただしハップルトレーディングポスト、ナショナルモニュメント、キャニオンの3カ所を10名のレンジャーで回している。
- ・ 自分は基本的にストーリーテラー、小道具は使わない。壁のペトログリフが小道具だと思っている。
- ・ 言葉に気をつけている。「チーフ」は使わず「スーパーバイザー」と呼んでいる。
- ・ 科学的な話と、オーラルヒストリーの両立、伝え方を考えなければと思う。
- ・ 自分たちは土地と強く結びついている。自分は往復7時間以内なら仕事に通うが、自分の家を離れること（遠くに赴任すること）は考えられない。



四輪駆動車ツアー



爆走中



ナバホ族のドライバー兼ガイド（右）



岸壁の中腹にある遺跡



古代プエブロの住居跡



レイヴィスさんの解説



壁のペトログリフ



強い棘を持つ植物



ホワイトハウスという聖地



谷の中にあったトイレ



Green Bird Grasshopper



ジェニーさんの桃、小粒で甘い

- ・「アナ・サズィ Ana sazi」：外側の／人々… → 「部族」の意味の誤解から「敵」と白人に間違っ
て伝わった。「アナ・サズィ / ネヒ・サズィ」という言葉がある。
- ・ナバホの言葉にはとてもいろいろな意味が含まれている。英語にそのままは訳せない。
- ・古代プエブロの人々がこの谷に住み、1300年代半ばすぎに消えていった。そのあとホピ族が移り住み、
やがて他に移住していった。そのあとにナバホ族が来た。
- ・ナバホの言い伝えは、各家ごとに語り伝えるストーリーがあり、家によって少しずつ話が変わる。ナバホ
の創生神話は冬にしか語ってはいけないので、これを聞いたかったら冬に来てほしい。
- ・ホワイトハウスは昔の住居跡だが、自分たちの聖地でもある。ホピ族、ナバホ族それぞれにとって聖地。
今、自分の家族が遠くの病院にいるので、このタイミングでここに来て祈ることができるのをとても感
謝している。これから自分はナバホのやり方で祈りを捧げるが、その様子は写真や動画に撮らないでほ
しい。

● 桃農家・ジェニーさんを訪問

- ・収穫した桃をトラックに積んで我々一行を待っていてくれた。
- ・桃は小粒で、皮が少し毛羽立っている。皮を服の袖で少しこすってから食べるように言われ、かじるとと
ても甘くて美味しい。みんなにお土産と言って袋に分けて持たせてくれた。
- ・奥に小さな家が見えた。オフグリッド、自家発電の家。自分と孫とで暮らしているとのこと。
- ・雪解けで谷底が川になると車が使えないと言っていたが、そうなるとこの崖を登って上の道に出るしかな
い。大変…

○夜は伝統的なナバホ料理を出す店 Junction でレイヴィスさんと共に夕食

Junction : <https://www.junctionrestaurantaz.com/>



Day4：9月10日（火）

●ハブル・トレーディング・ポスト国立史跡（HUTR、アリゾナ州）

Hubbell Trading Post National Historic Site : <https://www.nps.gov/hutr/index.htm>

- ・ナバホ語「ヤーテー Yá'át'ééh」 ヤー：everything 万物
ター：everything here 大地
→ 「全ての宇宙 全ての大地 全ての私とあなたの間にあるものが幸せでありますように」
- ・ナバホ：大きく4つのクランがある：Towering House, Bitter Water, Mud, …
→ 歴史的なクランは7つくらいで、今は100以上ある。クランは増えていく。母親が日本人なら、日本ク
ランができる。

→ レンジャーに促され、参加者全
員で自分の出身地と自己紹介を
回していった。



●ウィリアム・ヤゼーさん

- ・出身は Yellow Cray、スパイダーロックの近く。
- ・クランは Five fingers being 「自然と関わる人間」 → 家族ごとにクランのストーリーは異なる。

●シャナさん

- ・シャトー（日の出の意味）のクラン出身。
- ・自己紹介は、名前、出身（母方、父方、祖父母までのクラン）を述べてこの土地に挨拶をする。これは他人の家に挨拶なしでは入らないのと同じで、この土地と自分を結びつける行為。



シャナさん (左)

ウィリアムさん (中央)

<ハブル・トーディング・ポスト>

- ・ John Lorenzo Hubbell が1878年に交易所を購入した。ナバホ族に物品やサービスを提供し、ナバホ族の織物や銀細工などの工芸品を販売した。1967年に交易所がNPSへ売却され、国立公園となった。

<歴史>

- ・ 1864年、キャニオンデシェイなどに住んでいたナバホ族が、合衆国の軍人キット・カーソンが指揮する軍により土地を追われ、家や畑を焼かれた。そして約20日間で400マイルの強制徒歩移動「ロング・ウォーク」と収容所での4年間で、強制移住の1万人のうち数千名のナバホが命を落とした。
- ・ 1868年、合衆国とナバホに条約が結ばれ故郷に戻ってきたが、前より条件の悪いエリアに居住、土地には家も畑も何もない状態だった。
- ・ やがて Trading Post で必要な物資の交換を始め、少しずつ収益が得られるようになった：生活用品、工芸品など。Trading Post はナバホと近代的なものが出会う場所になった。
- ・ 遠方との交易が生まれ、物と情報が行き交う場所になった。その後、300のTrading Postが生まれた。



再現されたカウンター



ロング・ウォークの解説展示



羊の毛織物の展示室が充実



染色用植物の説明



糸紬ぎの実演をするシャナさん

<役割>

- ・ 買い物は、今はスマホやネットなど多様なマーケットができて、Trading Post の役割が変わってきた。小さいTrading Post は経営できなくなった。大きいPost は今もビジネスや交流の場になっている。今、ここは国に売って（国立公園として）保存しつつ、活用してもらう形。
- ※ Trading Post は国有地で（国に売却）、そのまわりはナバホネイション。

- ・ NPSは、ここを地域の学校や多様なところと繋げて、地域に開かれた施設にしている。人々を繋げるイベントなどもやっている。NPSとナバホの連携の良い例になっている。
 - ・ 地元民との信頼関係、展示に反映されていないものを、インタープリテーションでより Justify していく。いろいろな歴史の見方を伝えていく。
 - ・ 展示にはナバホのコミュニティの意見を入れている。
 - ・ 今は、新しく作られた「Trading Post」に見えるようなお店がたくさんある。
-
- ・ ハブルには学校のシステムもあった。そうするとコミュニティスペースになる。
 - ・ 服や靴など、なんでも売っていた。
 - ・ 「ガナード」というChapter House は、今はビジターセンターになっている。
 - ・ 病院、工場（こうば）、キリスト教の布教も行われた。
-
- ・ はじめは物々交換で、ハブルさんの時代にトークン（地域通貨）が使われ、そのあと現金になった。
 - ・ 毛織物は家族の仕事：羊の世話は子ども、織機を作るのは男性、織るのは女性。織物を作るには計算など色々な能力が必要。羊は肉と織物で現金収入になった。
 - ・ ここで売っていた食料は、ナバホにとってあまり健康的な物ではなかった。
 - ・ ナバホはアルコール耐性がないので、ハブルさんの時代からアルコールは置いていない。



現在のトレーディング・ポスト



生活雑貨とお土産物を販売している



ナバホの織物の実演

<House - ハブルさんの家>

- ・ ハブルさんの家は1900年から10年くらいで建設された。
- ・ 他のトレーダーはテントに泊まり、一時的にトレーディングポストを訪問し仕事をしていたが、ハブルさんは家を建てて住むことで、土地に根差すことを示し、ナバホからも信頼されていた。
- ・ 中のものは全て当時の本物なので、中は飲食NG、靴にはカバーをして中に入る。
- ・ 家の中の写真は、全体像のみOK、1つのものをアップで撮るのはNG。
- ・ 室内は、ナバホとアングロサクソンの文化がうまくブレンドされている
- ・ 天井のかご：初めは壁にかけられていたが、飾り物が増えて娘さんの代で天井に下げられた。
→ ナバホにとっては不吉な置き方で、この家に入りたがらない人もいる。
ナバホの人には、こういう形になっていることをあらかじめ伝えてから見学してもらう。
- ・ E. A. Burbank 1898：バーバンクが描いた先住民の肖像画が多数飾られている。
ジェロニモの絵がはじまり。カリスマ性に感銘を受けて、囚われていたネイティブの顔を描いた：アパッチ、ナバホ、ホピ、スー族など。バーバンクは晩年の15年をここで過ごした。



ハブルさんの家「House」



室内の様子



靴に不織布のカバーをして入室

●ペトリファイド・フォレスト国立公園（PEFO、アリゾナ州）

Petrified Forest National Park : <https://www.nps.gov/pefo/index.htm>

- ・ Chinle Formation（チンレ層、約2億年前・中世代三畳紀後期の堆積層）が広がるエリア。珪化木や多数の化石、鉱物が見られる。古代先住民の石器、ペトログリフなどもある。とにかく広ーい。

<案内> チーフ・インタープリターの Sarah Herveさん、化石研究者の Matthew Smithさん



珪化木



色の異なる地層



公園入口



サラさんの解説



道の途中にある小さな展示室



内部の展示



ビジターセンター前にて



サラさんとマシューさん



マシューさんの作業机



標本庫：鳥標本



標本庫：陶器やカチーナ人形



標本庫：化石（タイプ標本も！）

- ・あまり見学の時間がなく、非常に駆け足で公園内を回った。
- ・マシューさんの化石研究の作業机が、建物の大きな窓越しに外から見える。見学に来た人とそこでコミュニケーションが取れる工夫があった。
- ・研究室に入らせていただき、貴重な標本庫を見せていただいた。感激。
- ・ここは半日いても回りきれないくらいエリアが広く見どころが複数ある。古代プエブロの考古学、恐竜などの化石学、地質学、砂漠の生態系など、扱うテーマも多様。



○夜、ホルブルックにてリンさんの友人で日本酒醸造家の Atsuo Sakurai さん宅で BBQ ディナー。



東から西へ、延々と続く貨物列車。輸送の大動脈。



アリゾナの大地に沈む夕陽

<ナバホ語メモ>

- ・ Deneh ディネイ：ナバホ語で「人」→「彼女はディネイなの」＝「彼女はナバホなの」の意味

※先住民の呼び方

- ・ Indigenous people：先住民
- ・ Native Americans
- ・ Indians：白人はよくこう言う、やや差別的 アボリジニもやや差別的
- ・ First nation, First people：はじめに来た人々

※アルバカーキにあるプエブロ文化センターは「Indian Pueblo Cultural Center」だったが…？

Day5：9月11日（水）

●モニュメント・バレー・ナバホ族公園（アリゾナ州）

Monument Valley Navajo Tribal Park：<https://navajonationparks.org/navajo-tribal-parks/monument-valley/>

- ・ Monument Valley Navajo Tribal Park はNPSの管轄ではなく、ナバホ族の管理運営。

- <話し手>
- ・ ハニーさん：Park Manager
 - ・ ネルソンさん：入園料管理のSupervisor



ビジターセンター



ビュート（岩山）、2つのミトン



ネルソンさん(左) とハニーさん(右)

<モニュメント・バレーについて>

- ・ 1958年6月、ナバホ・トライバル・カウンスルによって公園設立 → ナバホのレンジャーが管理
- ・ 2002年冬の五輪ソルトレイクシティーのとき、ナバホの選手が聖火を持ってここを通った。
- ・ 2009年にビジターセンターを今の場所に移した。
- ・ 峡谷ドライブは17マイルのオフロード、11個の巨石に名前がある。
 - 例えば「ゾウの岩」：宣教師が名付けた。ナバホはゾウを知らない。
 - 岩のところでVenderが工芸品を売っている。ここでは電気のないようなところで暮らしている。

- ・ナバホには8つのナバホ・トライバル・パークがある。
→ Window Rock, Four Corners, Antelope Canyon (Lake Powell), Monument Valley
Little Colorado River, Tseyi' Dine' Heritage Area (Canyon de Chelly),
Camp Asaayi-Bowl Canyon, San Juan River

<ガイドツアー>

- ・バック・カントリー・ツアー：ガイド付き、5マイルのハイキング、車、乗馬ツアー
- ・約30社がオペレート、地元のツアー会社、公園から許可を得ている。
- ・2つの「ミトン」の岩：左のミトンを回る「星空ツアー」、右のミトンに左のミトンの岩の影が重なって映るのを見るツアーなど。
- ・フォレスト・ガンプの岩（マラソンのシーン）も人気。
- ・自転車レースもある。
- ・バック・カントリーのラフティング、撮影、ウェディングなどの許認可もやっている。
→ 毎年申請：安全トレーニング、レクチャー、保険
- ・複数の組織がこの周りの公園を管理している。

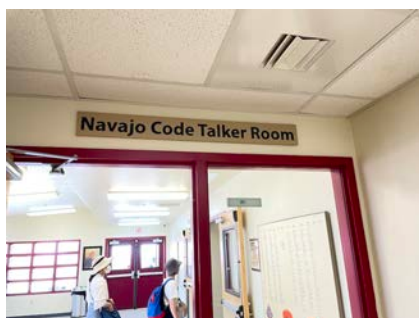
<ナバホのくらし>

- ・ナバホの家「ホーガン」（ドーム型の家）：女性用と男性用がある。 ※Canyon de chellyのは女性用
→ こうした話をインタープリテーションしたりする。
石はスパイラル状の石積み、東に入口、朝日が入る。
Sweat Lodge：焼石に水をかけてサウナ状にする → 成人の儀式
- ・創世神話は冬しか話せない（自然の神が冬眠している）。雷が鳴ると自然や虫が眼を覚ます。
- ・特にナバホのあり方を話すのではなく、いろいろな話の中に自然への接し方や心を感じてもらう。
- ・ナバホは走ることが大事：日の出の前に、太陽に向かって走る → 太陽を助ける。

<公園の管理>

- ・シャーロットさんの質問：脱植民地化の視点で、岩の名前をナバホのものにしたらい？
→ いまそれを準備中。
- ・Mission Statement：自然を守る、管理する → ナバホ民族のために。
楽しみの機会をつくる、自然の中で一人になる体験。
- ・ここはナバホの「家」。ダンスはこの場所から生まれた。開発などから守るべき場所。
- ・収入は入場料 → トライバル政府に入り、翌年の予算になる
- ・お土産、ホテルなどは他の団体の収入。
- ・NPSの場合、収入の80%は公園へ、20%は中央（内務省）へ。
- ・ナバホは100%ナバホネイションの中央に行く。使える予算は翌年の予算次第。各公園のバランスを取っている。
- ・これからやりたいこと：外灯をなくしたい、建物の灯りを砂岩の色にしたい。
水を使わないトイレ。舗装道路を砂利道に戻す - ただし未舗装はダストが植生をいためる。
- ・2022年は30万人が訪れた。公園は1日12時間くらいあけている。
- ・スタッフはインタープリテーションをあまりできていない。
- ・公園のガイド会社にはガイドライン Agreement がある。
→ ナバホネイションオーソリティ：火の扱い、健康、保険、救急、料金、内容
→ 毎年許可をチェックする。火と救急は、研修を外部で受けてもらう。ユタ州立大で地質学を学ぶ。
- ・車の点検、馬の健康については、この公園としてのトレーニングシステムはない。
- ・ナバホ公園にはNPSのような警察組織がない → アリゾナ州、ユタ州、ナバホ警察のどこにどう連絡するか、ツアー会社は把握しておく。

- ビジターセンターにCode Talkerの展示室があった。コードトーカーとは、第2次世界大戦時のアメリカ軍が話者や文献記録の少ないナバホ語を暗号とし、ナバホ族を暗号通信兵として活用したもの。太平洋戦線で活躍、日本軍は解読できなかった。ナバホ族にとっては、祖国アメリカを勝利に導いた民族の誇りとなっている。



Code Talkerの展示室



ナバホ族の誇りとして



沖縄戦の写真

●ナバホ国立記念物公園（NAVA、アリゾナ州）

Navajo National Monument : <https://www.nps.gov/nava/index.htm>

<案内> カレン・ビゲイさん：キャニオンデシェイのノースリム出身



公園入口



カレンさん（左）



トレイルの植物の説明板

- ・サンダルトレイル：トレイル沿いの植物に説明板が付けられていた。
- ・ジュニパー：赤ちゃんのゆりかご。ジュニパーをナバホ語でgadと言う。実をアクセサリに。魔除け。
- ・ピニオン松の木：松の実のシーズンには炒って食べる。

- ・新しい土地に行ったら必ず自己紹介をする。名前、出身(クラン)→両親と祖父母まで。それを土地や鳥たちが覚えている。…ここでも参加者で自己紹介を行った。
- ・人の家を訪れる時も自分から自己紹介と目的を先に言う。それで目的も果たせる。

- ・ここは3つの先祖の住まい：Betatakin（ベタタキン）、Keet Seel、Inscription House（碑文の家）

- ・「アナサズィ」には複雑な意味がある。アナサズィはホピ語では何か良いものという意味になる。「ナナサズィ」関わりを持った人たち。

アナサジはナバホ語で「古代の人」、ベタタキンを作った人々のことで、アナサジの子孫が今のプエブロ族、という説明もある。

<ベタタキンのストーリー>

- ・人々が5つくらいの場所を歩いて渡っていった（Canyon de Chelly, …）あるグループがここを訪れて、特別な場所だと理解した。夏は日陰で、冬は暖かい。ここは良い場所だということを周りの仲間に2〜3名が伝えにいった。残った人々は20-30年かけて石積みの住居を作った：1200年くらいから。1300年ごろ住居作りをやめた。大きな干魘があり、別の土地に移って行った。
- ・1つのクランは1250年ごろまで。その後9マイル離れたクランに移動した。

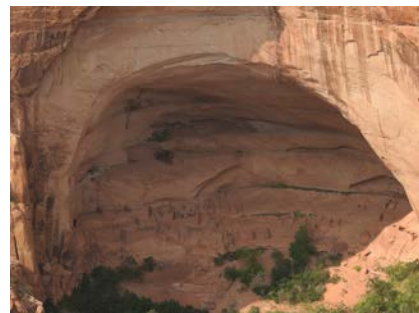
- ・ここにはホピの4つのクラン（鹿、フルート、水、シロイワヤギ →Bighorn Sheep？）がいた。全部で120部屋ほど。
- ・ホピ、ズニ、サザンパイユテの部族は今でもこの地と繋がっている。
ここを見つけた大統領が、その時ここにナバホがいたのでナバホ公園の名になった。実際に使っていたのは他の3部族。ナバホネイションの土地なので、ナバホが責任を持って管理している。ここで行うことは3部族に確認をとっている。



野外の解説版



対岸の岩穴



Betatakin 先住民の住居跡

○ホテルに戻る途中のレストランにて夕食。普通のメニューは食べきれないので Chef's Salad を頼んだら、大きいボウルにぎっしり詰まってドレッシングのパックが4つもついてきた。半分テイクアウト。



Day6：9月12日（木）

●キャニオン・デ・シェイ、ノース・リムでのハイキング

<案内> レンジャーのジャスティン・ヤズィーさん（ジェニーさんの甥？）



ノース・リムのスタートポイント



この落差を降ります



看板も手すりもロープも何もし

- ・このあたりは砂岩、2億5千万年前の地層。水が入って冬に凍って膨張すると岩が割れる。
- ・今は雪が減ってダムもでき、水が減っている。
- ・峡谷下の畑では、アルファルファとコーン、アプリコットの木を育てている。

- ・谷底の砂は少し粗い 水路で中は湿っている。コットントウリー、野菜なども育つ。
- ・岩の色、黒はマンガン、赤は鉄。黒いすじ模様をデザートバーニッシュという。

- ・「セイエ (Tséyi)」ナバホ語で「岩の中」within the rock → スペイン人が「シェイエ」、アメリカ人が「シェイ」と発音していった → Canyon de chelly の由来。
- ・ユリミたいな花は、トゲトゲボールの種に幻覚作用がある。
- ・ユッカの根をシャンプーにする。それに黒い砂を混ぜると黒髪がきれいに伸びる。
- ・セージブッシュは風邪薬。
- ・最近の人たちがホワイトセージを焚くのは自分たちから見ればファッション。
- ・神話の伝達は家庭ごとに子どもたちへ伝える。家庭によって話が少しずつ変わる。
- ・ホピ・プエブロはコの字型に長屋を作って複数の家族が暮らし、真ん中に儀礼を行うプラザ・広場、その前にキバがある。
- ・ナバホは各家庭がホーガンに住み、特定のプラザはなく、適当に広い場所でダンスをする。
- ・遺跡は神聖な場所で、ナバホは入らない。研究者が調査に来る。外部の人が入るのは複雑な気持ちもあるが、今はナバホ政府の組織があるので、そうした活動の調整をしている。
- ・死者は家の中か近くに葬る。ナバホはそこには近づかない。なので遺跡にも入らない。調査する考古学者は倫理観を持っている。
- ・ナバホ語で「アヒェッヘー」= ありがとう！



砂岩は思ったほど足が滑らない



Pinyon Jay マツカケス



棘の長いサボテン



実に幻覚作用のある植物



Cotton wood ポプラの一種



谷の下へ



砂に絵を描いて解説



砂を少し掘ると湿り気、水がある



帰りは登ります



ジャスティンさんは子どもの頃ここを滑り台にして遊んだそう。
(下には何のガードもない)
大事なものを隠す岩棚とか、このあたりが遊び場だった。



ジャスティンさん
レンジャーのハットとともに

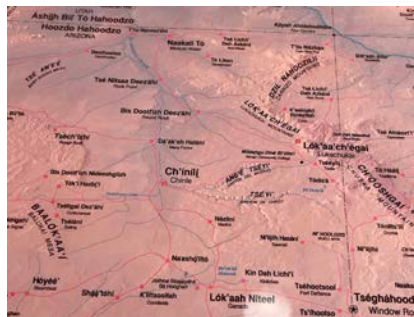
●キャニオン・デ・シェイのビジターセンター見学、サウス・リム〜スパイダーロックヘドライブ

・改めてビジターセンターを見学後、特に案内はつけず、自分たちの車で峡谷のサウス・リムをドライブした。
リムの上は標高1800~2000m。

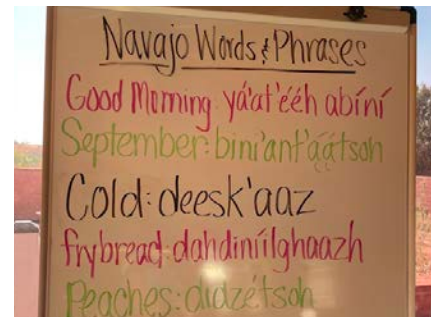
<ビジターセンター>



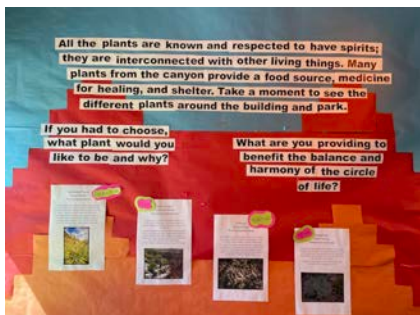
ビジターセンター



ナバホ語の地名マップ



ナバホ語のあいさつフレーズ



植物についての展示：

「すべての植物はスピリットを持つとして知られ、尊重されています。植物は他の生きものと互いにつながっています。峡谷の多くの植物は、食料、薬、家の材料を提供しています。この建物の周辺や公園にあるさまざまな植物を観察してみてください。」

- ・もし選ぶなら、あなたはどの植物になりたいですか？その理由は？
- ・あなたは、生命の循環のバランスと調和のために、何を提供していますか？

<サウス・リム>



スパイダーロック



峡谷が見渡せる



Turkey Vulture ヒメコンドル



「HOME」と書かれた看板



岩の中腹のくぼみに…



先住民の住居跡があった



Mexican Jay メキシコカケス



白い花



セージブッシュ



TSEYI 展望台



湾曲した谷



展望台の駐車場にナバホジュエリーを
売るベンダーさんの車。
パークレンジャーの親戚だそう。

Day7：9月13日（金）

●サンダーバードロッジにてセミナーの振り返り & 修了式

・研修の締めくくりとして、各自の振り返りを3つのフレーズで表現し、発表していった。



サンダーバードロッジ



振り返りの様子



フレーズの発表



参加者の言葉



フェルナンド副所長の話



修了式

- ・振り返りには、Canyon de Chellyのリン所長とフェルナンド副所長も参加し（この研修では異例とのこと）、最後にコメントをいただいた。

○五十嵐さん

- ・ Dialogue：語ること
- ・ Trust：お互いの中で作られてきた信頼性
- ・ Tolerance：寛容性

○黒田さん

- ・ Interpretation with Respect for people：人を尊重するIP
- ・ Interpretation with Consideration to people：訪問者に寄り添うIP
- ・ Interpretation what I want to do：私がしたいIP

○岡田さん

- ・ Connecting Mother Earth + Heritage + Visitors：自然と遺跡と訪問者との繋がり
- ・ Powerful storytelling in person interpretation：体で感じるIPの大切さ
- ・ Inclusive Park Management：インクルーシブな公園管理

○竹原さん

- ・ Joint Management：繋がり合う管理
- ・ Animals：動物たち
- ・ Decolonization：脱植民地化

○中山さん

- ・ Respect：土地への挨拶から始まった
- ・ Understanding：さまざまな視点
- ・ Relate：関係性

○内山さん

- ・ Clarifying the image of Interpretation：IPのイメージの明確化
- ・ The spirit of Nature：自然のスピリット
- ・ Research on Native American：先住民族の研究

○和田さん

- ・ Clarify the message to be communication：伝えるべきメッセージを明確にする
- ・ Set up a system：体制を整える
- ・ Careful dialogue with the parties involved：当事者と丁寧に対話する

○古瀬(岳)さん

- ・ Decolonization：脱植民地化
- ・ Culture and Science：文化と科学
- ・ Connection：つながり

○増田さん

- ・ Co-management effort on-going！：共同管理の取り組みが進行中！
- ・ Powerful storytelling：強力なストーリーテリング
- ・ LOVE：ジャスティンのフィールドワークが印象的

○鹿谷

- ・ Balance of Open and Closed: Spirituality, Field Management：精神性やフィールド管理におけるオープンとクローズドのバランス
- ・ Connecting the Ancient to Now and Future：古代と現在・未来を結びつけること
- ・ Life and Culture based on Dry Nature and Ecosystem：乾燥地の自然と生態系に基づく暮らしと文化

○古瀬(浩)さん

- ・ Indigenous People-Led Park Management：先住民族主導の公園管理

Day8：9月14日（土）

●ニューメキシコ州サンタフェ訪問

- ・ 前日ニューメキシコ州に戻り、終日サンタフェの街を自由行動



Northern Flicker ハシボソキツツキ



The Oldest House



San Miguel Church



小川の周りが美しく整えられていた



聖フランシス大聖堂



広場前のレストランカフェ



The Burrito Cafe



で、ランチ！

広場を囲む回廊で、先住民族のジュエリーがたくさん並べられていた。



Santa Fe Botanical Garden



の受付



多様な植物、解説板付き



Whole Foods Market



フルーツや野菜の並べ方に感動する



ナッツ類は量り売り



フレーバードせっけん、包装なし



レジは紙袋のみ



Trader Joe's



WFMに感動しすぎてあまり写真を撮らず。お土産買いました。



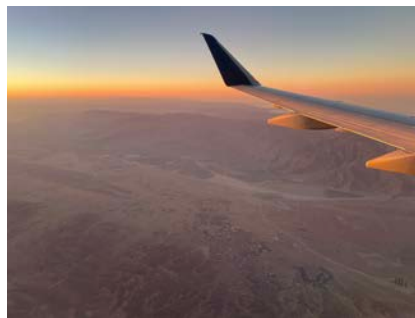
Day9：9月15日（日）

●アルバカーキからLA 経由で帰国

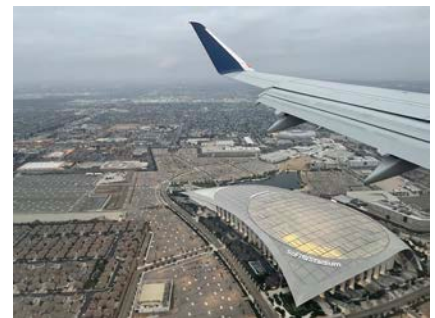
- ・未明にホテルを出てアルバカーキ空港へ。レンタカーを返却し、ロサンゼルス経由で帰国。
皆さまお疲れ様でした。どうもありがとうございました！



古瀬さんと増田さん、ドライバー役
本当にありがとうございました！



眼下に砂漠の中のパームスプリングス



LA、大都会に戻ってきた！

<鹿谷の感想まとめ>

- ナバホ・ネイションとNPSの関係作り：NPSが本当に気を遣いながら公園の運営管理をしている。先住民との複雑な歴史的経緯がある中で、ナバホ族とどのように信頼性を作り、相互理解を進め、課題の解決に向けて共に動いていくとするか、という姿勢は、自分の住む沖縄と本土との関係性にも重なる部分があると感じた。
- ナバホ族を始めとする先住民が、土地と祖先に対する深い愛着と敬意を持った文化を形成していることがまず土台にある。その土地を観光資源として利用し外部に開いていくことにに対し、どこまで人を入れるのか、どのように使うのか、どのように自分たちの歴史・文化・精神性を伝えていくのか。そうしたフィールド管理におけるオープンとクローズドのバランスを取りながら自分たちの経済にも貢献していくことは、まさにエコツーリズムであり、インタープリテーションが力を発揮できる余地がもっとあるようにも感じた。
- 歴史・文化遺産を伝えるという行為は、古代の様子に思いを馳せることで、そこから現在・未来を結びつけること。過去に早魃で住居を放棄し移動していった古代プエブロの人々の営みが、温暖化による気候変動が起こりつつある現代と近い将来に重なって感じられた。
- 砂漠の高地という環境がどのようなものなのか知りたかった。実際には、乾燥地ではあるが想像以上に雨も雪もあり、砂の中には湿り気があり、植物が生えていた。温暖湿潤な日本から見れば厳しい自然環境だが、こうした自然と生態系に基づいた暮らしと文化がしっかりと紡がれていることが興味深かった。
- 振り返りの際にCode Talker についてコメントし、沖縄戦にナバホ族が従軍していたこと、ナバホの誇りとして語られていることについて、アメリカとナバホの関係、日本と沖縄の関係を考え複雑な気持ちを抱いたことを伝えた。それに対しフェルナンド副所長が、自分たちは民族の誇りのストーリーとしてしか捉えてこなかったが、相手側の立場を初めて意識した、I'm sorry, と言ってくれたことに対しとても感銘を受けた。民族や立場を超えた相互理解は、こうした姿勢から生まれてくるのだらうと思った。
- 研修中に聞けなかったけれど気になっていたこととして、Canyon de Chelly はプエブロの遺跡であったり、ナバホ・ナショナル・モニュメントもプエブロの遺跡と聖地であり、それがいまナバホネイションの中にあるからナバホが管理している、という部分。プエブロ部族の人たちにとってそれはどう見えているのか、協力体制は十分なのか、

そこからの観光収入はナバホのみに還元されているのか？難しい問題かもしれないが、課題があるならどこかのタイミングで、こうした活用と管理の課題を部族同士で解決する時が来ると良いのと思う。

○日本IP協会・古瀬さんと増田さん、ずっと同行してくださったNPSのRudyさん、受け入れ先の全ての皆さん、共に参加した皆さん、そしてナバホの地へ。とても充実した楽しい研修でした。本当にどうもありがとうございました！

文責：鹿谷 麻夕

付録：

Day1：9月7日（土）の合流前

○Indian Pueblo Cultural Center <https://indianpueblo.org/>

・鹿谷は前日にアルバカーキ入り、7日の日中は市内にある「Indian Pueblo Cultural Center」を見学。ナバホ族とはまた異なる、プエブロ部族の文化と歴史の展示がとても良かった。土曜日は中庭でズニ族のダンスがあり、観光用で観客はほぼ白人。受付やショップなどで働いているのは先住民族の方々がほとんどと思われた。ミュージアムの展示は自然に寄り添うプエブロの暮らしや工芸、歴史が丁寧に解説しており、あまり人がいない館内をゆっくり見ることができた。



Indian Pueblo Cultural Center



ズニ族のダンス



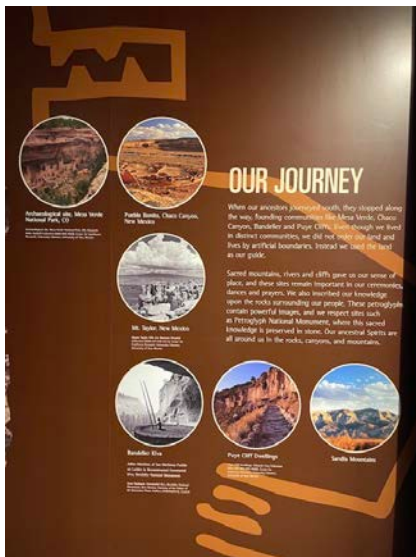
NM州には19のプエブロ部族



暮らしの工芸品



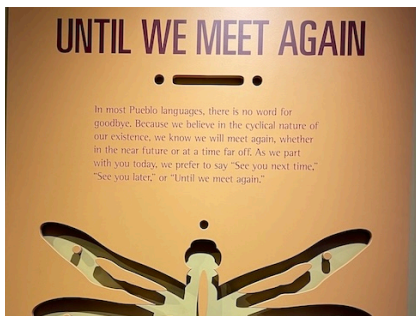
緻密な手描き



民族の歴史的な「旅」



スペイン人の侵略、折られた十字架



最後の展示：また会う日まで

←「ほとんどのプエブロ語には「Goodbye」にあたる言葉がありません。私たちの存在は自然の循環の中にあり、近い将来でも遠い未来でも、必ず再会すると知っているからです。今日あなたと別れるにあたり、私たちは「また今度」「また会う日まで」と言いたいです。」

←プエブロのリーダー達